

表現が許されるならば、カナダ文化の「配給システム」は外国作品が氾濫しすぎて、自国の作品のための余地がほとんど残されていない、といえる。われわれの問題はそれにどう対処するかにある。われわれは、無理強いしたり、種々の表現に注文をつけることなしにカナダ文化の確立を考へなければならぬというジレンマに立たされている。

具体的に対処すべき問題は多い。芸術家の生活上、芸術的訓練の増加と質的改善、文化的発展に対する大学の役割の増進などであるが、それらは皆、つまるところ、政府の関与がどういう形をとるか、また、その関与の意味は何であるかといった将来的な問題に集約できる。カナダ文化を育成するために、政府は引き続きどの程度まで力を尽すことができるのか、いやそもそもそうすべきなのだろうか。そして、どれだけあれば十分と言えるのだろうか。われわれは、文化の発展が国民生活を維持する上で必要であること、また、芸術というものがわれわれの文化を表現するための最も有意義かつ永続的な方法であることを知っている。また、芸術というものが、個人的で、予測のきかない、金のかかる商売——マスプロ時代の中の手作り——であることも知っている。さらに、どのようなメカニズムが採用されようとも、伝統的にわれわれに不利に働いてきた経済的な力——安くて魅力的な外国作品がすぐ手に入り、わが国で作品を創ったり普及したりするのは莫大な出費を要するような状態を作り出す経済的な力には、われわれは断固反対する。政府は、カナダの作品の制作と流通にもっと強力に介入して、国民

に文化的選択の権利を保障すべきなのだろうか。それとも、政府は、この分野の活動を広く個々の企業家にまかせるべきだろうか。あるいは、カナダ人がこの分野で直面している競争上の不利、いいかえれば現在の市場構造に組み込まれている不利な面を相殺するため、法律や規則を制定するような間接的な支援的をしほる、中間的立場を取るべきだろうか。

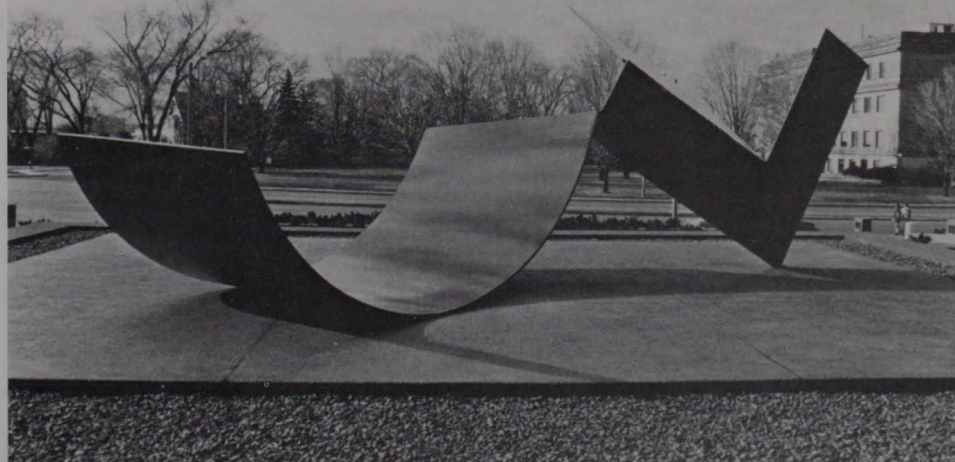
他にも、たとえば、教育と文化との関係といったような問題がいくつかあげられる。教育は、ある意味では、文化の発展のための苗床である。カナダでは、教育の責任は全く州の管轄に入っている。しかし、もしわれわれがひとつの国として、自国の文化について心配しているとすれば、カナダに関する教課やカナダ独自の教材作製を国がもっと重視すべきではなからうか。幸いなことに、州政府と連邦政府は、そのような相互に関わりのあることについては協議する、との合意に達している。

文化的バラエティの増大や変化は、カナダ人の生活にどんな影響を及ぼすだろうか。多文化主義というものは、決して博物館的な文化のことを言うのではない。それは、われわれに過去の伝統を認識させると同時に、そういった伝統がカナダで新しく根をはやし、現代的な表現として成長するのを助けるものである。この場合の課題は、国民相互間の言語やバックグラウンドの違いが、警戒や分裂の原因ではなく、かえって誇りと力強さの源泉であるような国——政治的には統一さされているが、画一化は拒否するような国になることである。

以上のような重大な問題に対し、私は

そのすべてに答を用意しているというつもりはない。また用意すべきだとも思っていない。私は公僕であって予言者ではない。しかも、カナダ文化の発展に関心を持っていろいろなレベルの政府のうちの一つに属する一公僕にすぎない。連邦政府は、大きな、影響力の強い後援者である。一九五一年にマッシー委員会の勧告を受けて、連邦政府はその財力と立法権を使って、今では世界的に知られるほどの高水準の文化的発展と

芸術的成果をカナダにもたらしている。しかし、同時に、連邦政府のよくなし得ない事がある。今では州も芸術を支援する活動に深く関わっている。文化的発展を継続させる面では、州にはそれぞれの地域に見合った行き方があり、これはもちろん連邦政府の政策同様、意義のあるものだ。文化の問題はますます重要化、複雑化しているが、そうした問題の処理が国民のニーズや期待を最もよく反映する形で行われるべきものであるとすれば、各行政レベル間の調整と協力はますます必要になっていくだろうと思う。また、私が提起したような問題に関心をもち個人的あるいは組織的文化後援者は、



他にもたくさんあるが、重要なことは、そういったわれわれすべての努力を統合することである。

以上述べてきた問題は、長い時間をかけて検討されるべきであり、即答の必要はない。表現の自由の原則、芸術的優秀性への希求、それに国民の自己認識の重要性についての確信といったものが存在する限り、カナダ人はカナダ文化の発展について活発に考え続けて行くことであろう。われわれカナダ人は、文化と国家についての力強い表現を育んでいこうと固く決意しているのである。

(文化省次官)